

寸止めの金責めAV撮影がいつの間にかガチンコに！
気弱なAV女優がドS覚醒し鬼の金潰し、
そしてファン感謝祭に集まったドS女子たちが
M男優の金ちゃんを狙う！



1章 金責めAV撮影開始！ 寸止めのはずの金蹴りがクリーンヒット

ビル。

いくつかの撮影スタジオが集まったビルの一室に、三十人ほどの女が集まっていた。

その中に一人だけ男がいる。

この前のお笑いライブでも後輩が作ったいい雰囲気をつぶ壊しにして場を冷却して響きを買った男。

次に出た別の後輩が何とか場を盛り上げて事なきを得た。

——嫌味な奴だよ。

思い出すと、辻田はそう考えてしまう。

——先輩がこけたんだ、自分もこけるのが後輩だろ？ それを自分だけちゃんとやりやがって、俺が無能みたいじゃねえかよ。おかげでマネージャーのクソマ○コに胸倉掴まれて怒鳴られたんだぞこっちは。

殴られるかと思った。

売れない芸人数人を担当している二十代半ばの女マネージャー、岡下。

若い連中がミスをするによく物陰で平手打ちを食らわしていた。

しかし流石に、五歳ほど年上の辻田にそれは出来ないようだった。

——まあそりゃ当然だよな。男で年上で……そんな相手にビンタとか、人としておかしいもんな。

カメラマンなどが準備を進めている。

マン、といっても女ばかりだ。

AVのプロダクション。

小さい会社で、全社員女性という。

とはいえ、別に女性向けの作品を作っているわけではない。

今作っているのは、金責めAVだ。

ため息が出る辻田。

——金責めって……女は簡単にいってくれるな。

ナノテクノロジーが発達し、睾丸ぐらいなら潰れても薬一粒で十秒で再生する。

それは男にとっては万が一、万が一の場合でも救済されるという希望である。

しかし一部の女にとっては「なんだ、じゃあ潰してもいいんだ」という話になるようだ。

辻田には理解不能で、そういう話はM男たちの妄想だと思ってきた。

しかし今回マネージャーが金責めAVに主演で出演する話を持ってきて、プロダクションの女たちと打ち合わせをしたとき、その話はどうも妄想ではないのではないかと辻田には思えてきた。

——本当に、平気で「潰れても大丈夫」とか連発するからな。いや、まあ金責めAV作ろうとする連中だから、あえてそういうこと言ってるとも考えられるが……

考えている辻田に、巨乳で、やや太り気味と思える監督が近付いてくる。

——目付きがヤバイよなこの人。

「どうも辻田さん。元気？」



「死にそうです外村監督！」

芸人らしく一発かますと、監督の外村が歯を見せる。

「死んでもいいから、キ〇タマだけよろしく！」

「はあ……はぐっ」

ギュ、と海パンというかビキニパンツの股間を握られる。いきなり、生殖器を握ってくる。女の手が玉も竿もグニグニグニグニと遠慮なく揉み解す。腰が引ける。監督といっても辻田よりは若い女だ。プルプル巨乳を揺らしながら揉んでくる。反応しそうになる。

「ちょ……ほおお」

「ん、カップもつけてないね。結構。それと……」

ニタ、っと頬を緩める監督。

「かなり大きめじゃない、辻田さん」

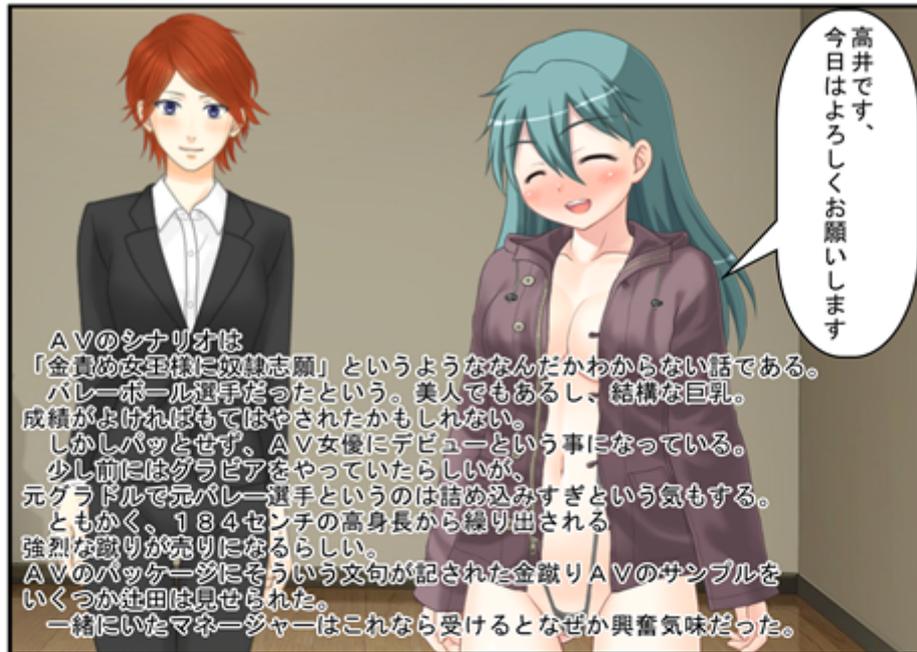
いうだけ行って離れていく女に今さらながら動悸がしてくる。

「なんだったんだ……」

と、別の女二人が近付いてくる。一人はやたら背が高い。

辻田より背が高いが表情は柔らかく、威圧感はない。服装はほぼジャケットだけ。下はどうも紐ビキニというか、紐ワンピースだろうか。

——とんでもない恰好だな。



AVのシナリオは「金貴め女王様に奴隷志願」というようななんだかわからない話である。

「高井です、今日はよろしくお願ひします」

バレーボール選手だったという。美人でもあるし、結構な巨乳。成績がよければもてはやされたかもしれない。

しかしパツとせず、AV女優にデビューという事になっている。

少し前にはグラビアをやっていたらしいが、元グラドルで元バレー選手というのは詰め込みすぎという気がする。

ともかく、184センチの高身長から繰り出される強烈な蹴りが売りになるらしい。AVのパッケージにそういう文句が記された金蹴りAVのサンプルをいくつか辻田は見せられた。

一緒にいたマネージャーはこれなら受けるとなぜか興奮気味だった。

——強烈な蹴りって……簡単に言うなよ、蹴られるのは俺だぞ。

その高身長女子がモジモジしながら話す。

「あの、もう聞いてくれてると思いますけど……蹴るのは太股ですから、安心して下さい！ その、タマタマは……ちょっと蹴れないっていうか」

チラチラと下を見てくる。どうも、辻田のパンツのふくらみ辺りを。

——そこ蹴らないって話だよな?! 見られてると「ここ狙うんだよね」っていわれてる気がして不安になるな。

と、高井の女子マネージャーが頭を下げる。

「うちの高井がすいません……本当に蹴ってる方が絶対喜ばれるのに……」

「いや、いいですよ」

どの道、ギャラは事務所がほとんど持っていってしまう。

なら、実際に睾丸を蹴られない方がいいに決まっている。

——っていうか「キ〇タマ蹴らないでごめんなさい」ってどんな世界なんだよここは。

考えているだけで玉が縮む。

いや、縮まない。

金弛緩剤、と呼ばれる薬を飲んでいて。男性器の手術時に萎縮を防ぐ薬だという。

パンツをはき、蹴られるのは太股の内側という話なのに、念のために飲むようにと監督に言われていた。

何か不安になるが、プロ根性と思うしかない。

金蹴りオンリーAVだというので、パンツを脱ぐ必要はない。

そのうえ、急所を蹴っているように見せかけて太股を蹴るのだから、万が一のために金的サポーターをつけても構わないという気もする。

が、サポーターは形でわかるからと、つけることは許されなかった。

それはまあ仕方ないか、と辻田は思う。

実際に急所を蹴らず、太股を蹴るのは仕方ないかもしれないが、流石に防具までつけられたら客としてはガッカリするだろう。

芸人として、客が喜ぶことをしたいという思いはある。

「そろそろ本番行きます! あ、でも本番は無しですから!」

ADらしい女性。

女ばかりだ。

女だけの中で、形だけとはいえただ一人の男として急所攻撃を受けるというのは、マゾでもなんでもない辻田には結構なプレッシャーだった。

だがまあ、バイト感覚の半端AV男優としては、本番を求められるよりは一様楽ではある。

というか、本番なら立たないだろう。

——周りの女がみんなこれからやっついていいっていう乱交状態ならまだしも、仕事してるだけの平常心で見守られるんじゃな……

高井がジャンパーを脱ぐ。

背が高いせいか、かなり巨乳に見える。

それが、縦の紐で乳首と女陰を僅かに隠されているだけ。

唾を飲む。

立ちそうだ。

が、緊張で立たない。ちょうどいい話だ。

スタジオには特に何も置かれていない。

コンクリート打ちっぱなしの床。

壁も同じだ。

奴隷志願のマゾ男が女王さまに試験を受ける何処かのビルの個室、という設定らしい。

巨乳を見あげつつ、高井の前に立つ。

「あんた、本当に私の奴隷になりたいのかい？」

「オッスお願いします！」

——って何だこの台詞は。

台本通りなのだから仕方がない。

高井が肩に手をやる。柔らかい指に女を感じる。背が高かろうがなんだろうが、やはり女の体、女の力だ。

「私の奴隷になるなら、このぐらいのことは我慢できないとね。キ○タマ蹴りだよ！」

「は、はい！」

足を開く。

太股を蹴られるとはいえ、恐怖だ。

もしミスしたら。

ミス、といっても中々ない話だろう。

爪先が振り上げられる。

途中で軌道が変わる、膝に当たる。横から蹴られても大して痛くはない。というか、勢いも乗っていない。

だから辻田は眉を顰めるだけだ。

むしろ、高井が叫ぶ。

「いたいっ！」

バシ、と大した音も立てず、高井が足を引っ込める。

「カット！ 何してんだコラ！ 女王さまが「痛い」とか何だ！」

監督が目を吊り上げる。

「膝の横蹴ってんじゃねー！ 明らかにキ○タマに当たってないのが丸わかりだろうがよ！ もっと太股の上のほうを蹴れ！」

「で、でも監督、タマタマに当たったらと思うと……」

——そう、それが普通の女の感覚だよな……だってキ○タマだぞ？

思わずうなづく辻田。と、監督が見てくる。

チラッと見てから、すぐに高井に顔を戻す。

「いいんだよキ○タマぐらい当たっても！ 薬は一杯用意してるから、キ○タマの一つ二つ三つ四つぐらい潰れてもすぐ治るからいいんだって！ むしろ潰してやれ！ 事故でキ○タマ潰れるなんて美味しいシーンだから！」

「ちょ、まてよ……」

膝を締める。

「監督、キ○タマに実際に当てないという話で……」

「ああもちろんそうだよ！ 大丈夫！ 今のは言葉の綾！ 高井、太股蹴るんだぞ！ でも、事故で多少キ○タマ掠めるぐらい、男ならガタガタ言うなよ、な？ この子怖がってるよ」

「はあ……」

——っていうか監督を怖がってるんじゃないのか？

高井は確かに恐怖に強張った顔をしている。

力では劣るだろうが、自分より背は高く体格がいい女が怯えて見てくる姿は少しそそのものを感じる辻田。

自分の力の強さを実感できる気がする。

監督も怖いけど、もし睾丸に蹴りを当ててしまったら、この男はきっと激怒するだろうと恐れている。

実は、始めて付き合った男が怒りっぽいというより精神的に問題がある男だった。何かにつけて彼女を怒鳴り散らし、支配しようとするタイプだった。

バレー選手としてマネージャーもいたので、その支援で別れられた。が、すでに遅かったのか、彼女はすっかり男に恐怖心を抱くようになっていた。

そんな彼女にAVの仕事は無茶だ。

グラビアもきつかったが、何とか我慢できた。しかし売れないからとAVにでるように言われた高井はプロダクションを辞めようとする。

しかし、宣伝に使った金を返済しろといわれてはやめられない。

が、男性恐怖症気味の高井に本番は難しい。

折衷案として、金責めAV出演という話になった。

だがそれはそれで、高井にとってはきついものだった。

——タマタマなんか間違えて当たっちゃったら、絶対この人凄く怒るよ……

怖い。

背は低いとはいえ、大抵の男は同じく彼女より低い。

それで力が弱いとか、怖くないと言う話はまったくくないのだ。最初の男はむしろ小柄なほうだった。

それでも、最後のころは怒らせない事だけを考えて一緒にいたことを覚えている。

怯えた顔の高井。

それを見た辻田の頬が弛む。

「いや、大丈夫だよ高井さん、ちょっとぐらい当たっても気にしないって。むしろ演技しないでいいから楽だよ」

「っていうか、辻田さんもアレだよ、さっきの全然演技してなかったね」

「あ、いや……あんまりにも外れてるから……」

うっかりしていた。

蹴られたら、股間を押さえて転がる手筈だった。

だがいくらなんでも膝を蹴られて、股間を押さえるのは無理がありすぎるから動けなかった。

が、考えてみればそれはそれで面白いシーンかもしれない。芸人としては転がるべきだったか。

AV撮影のNGシーンがDVDにおまけについて、誰かがネットにアップして「この芸人は面白い」といわれる、ないとはいえない気もする。

——いや、そもそもNGシーンなんか入らないか……いや、面白ければ入れてくれるかも。

売れない芸人。

アイドルなら、AVから飛躍などありえないだろう。

というか、そもそもAVにでている人間は「アイドル」ではないと思える。

だが芸人はどこからブレイクするかわからない。

売りたい。

辻田は貧乏だ。

芸人といっても、仕事よりコンビニでのバイトが多いぐらい。

バイトが主な収入源ではフリーターと変わらないではないか。

だが、芸人を辞めれば本格的にフリーターになるだけだ。

会社は何だかんだいっても仕事をとってきてくれる、一様マネージャーをつけてもくれる。

ギャラは安い、それは安いというよりマネジメント料を取られているということだ。

……と、思わなければやっていられない。

まあ、芸人哀歌はこの際どうでもいい。

売れば全て解決だ。

金蹴りAVが大ヒットすれば、客がテレビを見ていて「あ、あのキ〇タマの」といってくれるかもしれない。

これが切っ掛けでファンになってくれるかもしれない。

金蹴りAV自体それほど多く売れるものではないだろうから、それでファンになってくれる人数も少ないだろうが、今はネットで誰がどこと繋がってるかわからないものだ。

案外影響力の強い人間が自分に気づいてくれるかもしれない。

などと、辻田が考えている間にテイク2の撮影が始まる。

「キ〇タマ蹴りだよ！」

「は、はいっ！」

足を引く高井。今度はギリギリのはずだ。

むしろ、下手を打って睾丸に当たる可能性もあると辻田は覚悟していた。

高井の爪先が振り上げられる。

高井の爪先が膝の横に当たる。

膝の横だ。

まったくギリギリどころの話ではない。

失敗だ。

でも、股間を押さえて転がろうかと思う辻田。

が、その反応より早く周りが動く。

激怒する監督。

駆け寄る高井のマネージャー。

「高井ちゃん！ もっとがんばらないと！」

「すいません！ すいません！ すいません！」

顔を真っ赤にして、半泣きで頭を下げまくる高井。

——気の弱い子だな……

監督が何か高井に言うが、埒が明かないとみたか辻田のほうに目を向ける。

「辻田さん！ 言ってやって！ むしろキ○タマ蹴って欲しいって！」

「え、ちょ……」

泣きそうな目で高井が見てくる。見下ろしてきているはずだが、上目遣いのように感じられた。

「そ、その……まあ、ちょっとぐらいなら当たってもいいよ？」

「ほら、キ○タマ潰して欲しいって！」

「どう考えても言ってないだろうがよ！？」

監督の無茶苦茶な曲解に思わず突込みが出るが、それもあまり高井は聞いていない感じだった。

「や、やっぱりこんな恰好とか恥ずかしいし……男の人の大事なところ蹴るなんて……」

「だから蹴る必要はないって！ っていうか蹴らないで！ 太股頼むよ！」

「こら辻田！ 余計怖がるだろ！ 蹴っていいんだよ、キ○タマなんて薬ですぐ再生するし！」

「……」

——やめてくれよ……思い切ってギリギリ狙われてキ○タマに当たったら痛い俺なんだから……

しかしそれをいうと、普通よりかなり気弱らしい高井はいつまで経っても**膝関節蹴り**を続けかねない。

「あ、あの……もし万が一当たっても、怒らないでくれますか？」

「まあ事故じゃしょうがないよね……」

「そ、それじゃ思い切ります」

三回目。

しばらく慰めた後、気を取り直して撮影が再開された。

「キ○タマ蹴りだよ！」

「は、はいっ！」

足を開く。

こころなしか、前より思い切り。

踏み込む高井。

足を振り上げる。目を瞑り、思い切り振り上げる。

足の甲が膝の横を通過し、太股の真ん中に達する。さらに上のほうに。ギリギリに達する。そしてそのままパンツのふくらみに減り込み、睾丸を押し潰す。

「はぐあああああああああああああああ！」

目を見開き、絶叫する辻田。

世界が終わる。

全身の皮膚が生え変わったような異様な感覚がぶわっと広がり、一瞬後股間で何かが発火する。



「あらあら、タマタマに当たっちゃったわね」

「ぶっ痛そう」

「笑っちゃ悪いよ」

「でも、キ〇タマ蹴られて蹲る男って笑えるよね？」

「本当にそんなに痛いのかなあ？ っと思えるぐらい痛がるしね」

「普段威張ってるくせに、キ○タマちょっとやられたらこのざま？ って思うわよね」

「そろそろ立ったら？ 金ちゃん潰れたわけでもないんでしょ？」

「やだ、まさかキ○タマ潰れてるの？」

「嘘、じゃあもう男じゃないじゃない。キ○タマ潰れてるなんて」

「蹴り一発で大事なものを潰れて去勢されちゃうなんてホントに男って脆弱ねえ」

「女の子の蹴りで大事な大事な男の金の玉が潰れた気分はどう？」

心配そうな顔で見下ろしつつ、辻田を取り囲んでいたいことをいう女性スタッフたち。

というか、本当に心配なのは顔だけと思えるような言動が多い。

本当にそういうことを女性スタッフらがいつているのだろうか。

睾丸から、心臓が止まりかねないほどの激痛を感じている辻田の幻聴かもしれない。

——ゆ、夢だ……夢なんだ。キ○タマ蹴られた男を、女が取り囲んで嘲笑するなんてありえない。目が覚めたら俺は**M1**で**優勝**してるんだ……

そんな風に辻田が思ってしまうほど、現実味の無い**金的嘲笑**をかます女性スタッフたち。

別に幻聴でもなんでもなく、普通に辻田が聞いているとおりの発言をしていた。流石に**DS女子の割合が世界一**といわれるうさぎ県に住んでいる女性だけのことはあった。

「辻田が回復したらテイク四撮るぞ。高井、謝ったのはともかく、今の蹴りはよかった！」

「あ、ありがとうございます！」

「次はちゃんと太股、もしくはもう一回キ○タマを蹴れ！」

「ふ、太股蹴ります！」

「万が一キ○タマに当たっても謝るなよ！ 辻田の神リアクションを無駄にするな！」

「はい！」

——いやリアクションとかじゃなくて**本当にキ○タマが痛い**だけだから……

思うが、まだ何もいえない辻田。

「やだ、まだキ○タマ痛いの？」

「そんなに痛いなら、もうタマタマとった方がいいんじゃない？」

女性スタッフに囲まれて**金的嘲笑**を受けつつ、ただ海老のように蹲っている。

体験版終わり

この後、辻田が更なる金責めとビンタに腹パン。

AVまさかの大ヒットでファン感謝祭に呼ばれ、DS女性だけのファンたちに終わりなき金潰し、という展開になります。

続きは製品版でお楽しみください